TADOKU JUNIOR　せかいのなぜなに神話　★★★☆☆ ふつう　554語

The Story of the Oriole

ムクドリモドキのおはなし

Florence Holbrook（1902年の本）　**原文そのまま**　朗読：Alan Mapstone

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？　北の王さまが南の国をのっとろうと、ものすごいあらしをおこします。動物たちがこわがるなか、小さなスズメバチが「たたかいに行かせて」と言いだして……。



The king of the north once said to himself, "I am master of the country of ice and snow, but what is that if I cannot be ruler of the land of sunshine and flowers? I am no king if I fear the king of the south. The northwind shall bear my icy breath. Bird and beast shall quiver and tremble with cold. I myself will call in the voice of the thunder, and this ruler of the south, his king of summer, shall yield to my power."

The land of the south was ever bright and sunny, but all at once the sky grew dark, and the sun hid himself in fear. Black storm-clouds came from the north. An icy wind blew over the mountains. It wrestled with the trees of the southland, and even the oaks could not stand against its power. Their roots were tough and strong, but they had to yield, and the fallen trees lay on the earth and wailed in

sorrow as the cruel storm-wind and rain beat upon them. The thunder growled in the hollows of the mountains, and in the fearful gloom came the white fire of the forked lightning, flaring through the clouds.

"We shall perish," cried the animals of the sunny south. "The arrows of the lightning are aimed at us. O dear ruler of the southland, must we yield to the cruel master of the north?"

"My king," said a little buzzing voice, "may I go out and fight the wicked master of the storm-wind?"

The thunder was still for a moment, and a mocking laugh was heard from among the clouds, for it was a little hornet that had asked to go out and meet the power of the ruler of the north.

"Dear king, may I go?" repeated the hornet.

"Yes, you may go," said the king of the south, and the little insect went out alone, and bravely stung the master of the storm-wind.

The king of the north struck at him with a war-club, but the hornet only flew above his head and stung him again. The hornet was too small to be struck by the arrows of the lightning. He stung again and again, and at last the king of the north went back to his own country, and drove before him the thunder and lightning and rain and the black storm-clouds and the icy wind.

"Brave little hornet," said the king of the south, "tell me what I can do for you. You shall have whatever you ask."

Then said the little hornet, "My king, on all the earth no one loves me. I do not wish to harm people, but they fear my sting, and they will not let me live beside their homes. Will you make men love me?"

"Little hornet," said the king gently, "you shall no longer be a stinging insect feared by men. You shall be a bright and happy oriole, and when men see you,

they will say, 'See the beautiful oriole. I shall be glad if he will build his nest on our trees.'"

So the hornet is now an oriole, a bird that is loved by every one. His nest looks like that of a hornet because he learned how to build his home before he became an oriole.

むかし、北の王さまがひとりごとを言いました。「わたしは氷と雪の国の主人だが、お日さまと花の国をおさめられないのなら、それが何になろう？南の王さまをこわがっているようでは、王さまとは言えない。北風に、わたしのこおりつく息を運ばせよう。鳥もけものも、さむさでぶるぶるふるえるだろう。わたし自身もかみなりの声でよびかけてやろう。そうすれば、この南の主人、夏の王さまも、わたしの力にまけるだろう。」

南の国はいつも明るく晴れていましたが、とつぜん空が暗くなり、お日さまはこわがってかくれてしまいました。北から黒いあらしの雲がやってきました。こおりつくような風が山をこえてふいてきました。風は南の国の木々とすもうをとり、カシの木でさえその力にはたえられませんでした。根はかたくて強かったのですが、まけてしまい、たおれた木々は、ひどいあらしの風と雨にうちつけられて、地面に横たわったままかなしそうにうめきました。山のくぼみではかみなりがゴロゴロとうなり、おそろしい暗やみの中で、ぎざぎざのいなずまの白い火が、雲をつきぬけてひらめきました。

「わたしたち、死んでしまう」と晴れた南の国の動物たちはさけびました。「いなずまの矢が、わたしたちをねらっている。ああ、南の国のやさしい王さま、ひどい北の主人にまけなければならないのですか？」

「王さま」と小さなブンブンいう声が言いました。「わたしが出ていって、あらしの風のわるい主人とたたかってもいいですか？」

かみなりは一しゅんしずかになり、雲の中からばかにしたようなわらい声が聞こえました。北の王さまの力に立ち向かいたいと言ったのは、小さなスズメバチだったからです。

「王さま、行ってもいいですか？」とスズメバチはくり返しました。

「ああ、行ってもよい」と南の王さまは言いました。小さな虫はひとりで出ていき、勇かんにもあらしの風の主人をちくりとさしました。

北の王さまはこん棒でスズメバチをたたこうとしましたが、スズメバチは頭の上へとびあがって、またさしました。スズメバチは小さすぎて、いなずまの矢も当たりませんでした。スズメバチは何度も何度もさしました。とうとう北の王さまは自分の国へ帰っていき、かみなりもいなずまも雨も、黒いあらしの雲もこおりつく風も、みんなつれていきました。

「勇かんな小さなスズメバチよ」と南の王さまは言いました。「おまえのために何ができるか言っておくれ。ほしいものは何でもあげよう。」

すると小さなスズメバチは言いました。「王さま、世界じゅうでだれもわたしのことをすいてくれません。わたしは人をきずつけたくないのに、みんなわたしのはりをこわがって、家のそばにすまわせてくれないのです。人間がわたしをすきになってくれるようにしてくれませんか？」

「小さなスズメバチよ」と王さまはやさしく言いました。「おまえはもう、人間にこわがられるさす虫ではなくなる。明るく楽しいムクドリモドキになるのだ。人間はおまえを見ると、こう言うだろう。『ほら、美しいムクドリモドキだ。うちの木に巣をつくってくれたらうれしいな』とね。」

こうしてスズメバチは、今ではムクドリモドキになり、みんなにすかれる鳥になりました。ムクドリモドキの巣がスズメバチの巣ににているのは、ムクドリモドキになる前に、家のつくり方をおぼえたからなのです。

たんご と クイズ　ムクドリモドキのおはなし

ice 氷	snow 雪	thunder かみなり
storm-clouds あらしの雲	lightning いなずま	hornet スズメバチ
oriole ムクドリモドキ	nest 巣	

Q1 北の王さまとたたかいに出ていったのはだれ？

① クマ　② 小さなスズメバチ　③ ワシ

Q2 いなずまの矢がスズメバチに当たらなかったのはどうして？

① スズメバチが小さすぎたから　② スズメバチがかくれていたから　③ 王さまが守ったから

Q3 スズメバチが王さまにおねがいしたことは？

① 大きな体にしてほしい　② 金のはりがほしい　③ 人間にすきになってほしい

こたえ

Q1 ②　雲の中からばかにされても、小さなスズメバチはひとりで出ていき、勇かんに北の王さまをさしました。

Q2 ①　スズメバチはとても小さかったので、いなずまの矢も当たらなかったのです。

Q3 ③　だれにもすいてもらえないスズメバチは、人間がすきになってくれるようにしてほしいとおねがいしました。

原田英語の多読ベストジュニア

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #22420（Florence Holbrook、1902年）。パブリックドメイン。
挿絵：この本には挿絵がないため、場面をイメージして AI（Codex）で描いた絵です。
朗読（Web版）：Alan Mapstone（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）
和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは 3 重チェック。人の目でも順次確認しています。